

## 唐後半期に於ける度支使・塩鉄転運使系巡院の設置について

著者	高橋 継男
雑誌名	集刊東洋学
巻	30
ページ	23-41
発行年	1973-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132221">http://hdl.handle.net/10097/00132221</a>

## 唐後半期に於ける

### 度支使・塩鉄転運使系巡院の設置について

高 橋 継 男

#### はじめに

国家財政機構が、国家機構の主要な部門を占めることは申すまでもない。その意味で、安史の乱勃発後、唐王朝の最高財政官職に成長した度支使・塩鉄転運使の地方出先機関である巡院組織を明らかにすることは、唐後半期の国制の一部の解明に連なると考える。筆者は先に安史の乱直後に於ける財政情況との関連で、劉晏の巡院設置について仮説を展開したが、本論は前稿を引き継いで、唐後半期に於ける度支使・塩鉄転運使系巡院の設置について、基礎的作業を試みるものである。

#### 一 度支使・塩鉄転運使の分掌制と巡院

唐後半期の王朝財政制度に関する特色の一つは、度支使と塩鉄転運使による分掌制である。即ち貞元八年(792)に至って、前者は唐朝支配下の西北部地域を、後者は東南部地域を分領した。かかる使職下の巡院設置は、当然この分掌制に関連があるので、「巡院」に注意しながら、分掌制が一応の確立を見るまでの経過を略述してみる。

この地域的分掌制の起源は永泰元年(769)第五琦と劉晏によるそれであり、これを継いで大曆六年(772)から同十四年(779)までは韓滉と劉晏が各々の地域を掌った。しかしその後、建中年間(780~783)から貞元八年の間は、この様な

明確な地域的分掌制が崩れたのである。それは兩税法を創めた楊炎の財政機構改革の試みに発端する。大曆十四年半ばから財政権を一手に掌握した劉晏に敵対し、更に劉晏の就任せる財政諸使が財政を支配している現状に不満の楊炎は、翌建中元年正月、尚書省本来の機構に復旧すべく上奏し、これに従って度支使・転運使を廢止して尚書省金部・倉部がその代任をしたのであるが、その結果は「既にして省職久廢し、耳目相接せず、振舉する能う莫く、天下の錢穀、總領する所無し」という状態であつたので、財政使職廢止の改革は失敗に終り、同年三月には判度支と江淮水陸轉運使が任命された。これは「一に劉晏・韓滉の則の如し」と評される様に、大曆年間分掌制に復歸したのであるが、楊炎による兩税法創始に伴って、度支が兩稅業務を統轄することになった。これによって度支使の地位は強化された様で、たとえば建中三年(782)八月、判度支趙贊の上奏に従って汴東水陸運兩稅塩鉄使・汴西水陸運兩稅塩鉄使が設けられたが、度支がその大要を總べたのであるから、この二使はいずれも度支使に統轄されたのであろう。即ち兩稅法施行を契機に、度支使は東南部地域にも支配権を及ぼす様になったものと考えられる。このことは貞元二年(806)正月、宰相崔造が再度財政使職を廢止しようとした試みを見れば一層明らかになる。旧唐書<sup>卷一</sup>崔造伝に

貞元二年正月、与中書舍人齊映、各守本官同平章事、……〔崔〕造久從事江外、嫉錢穀諸使罔上之弊、乃奏、天下兩稅錢物、委本道觀察使・本州刺史、選官典、部送上都、諸道水陸運使及度支巡院・江淮轉運使等並停、其度支・塩鉄、委尚書省本司判、其尚書省六職、令宰臣分判、乃以戸部侍郎元瑒判諸道塩鉄・權酒等事、戸部侍郎吉中牟判度支及諸道兩稅事、……諸道有塩鉄処、依旧置巡院勾當、河陰見在米及諸道先付度支巡院般運在路錢物、委度支依前勾當、其未離本道者、分付觀察使發遣、

とある。崔造による改革の内容は、諸道水陸運使・江淮轉運使・度支巡院を廢止し、兩稅錢物の上都への輸送は本道觀察使・刺史に委ね、度支・塩鉄の業務は尚書省本司が行う様にするというものである。ここで注意したいのは度支と兩稅の結合であつて、この改革後も度支と兩稅は一人で掌ることになっているほか、これ以前に諸道が度支巡院に付託して〔兩稅〕錢物を輸送している。この諸道は東南部諸道が中心であろうから、度支使管下の度支巡院が東南部諸道に設置されていることになり、これはとりも直さず度支使が東南部諸道にその財政支配権を及ぼしている証左となるのである。また崔造の改革案でも塩鉄のある所(塩鉄産出の所か)は、旧例に依り巡院を置くことになっていたが、右の上奏に従って出され

た詔勅には

……有塩鉄事処、毎道置巡院、令勾當<sup>⑧</sup>、

とあつて、塩鉄に關連ある所は道毎に巡院が設置されたことが判る。即ち塩鉄關係に於いては、巡院が不可欠の組織となつていたのである。ところで崔造による改革は、資治通鑑<sup>卷三</sup>三貞元二年十一月条に

崔造改錢穀法、事多不集、諸使之職、行之日久、中外安之、……既而江淮運米大至、上嘉韓滉之功、十二月丁巳、以滉兼度支・諸道塩鉄轉運使、造所奏皆改之、

とある様に前の楊炎の場合と同様、完全な失敗に終つた。安史の乱勃発後、王朝財政窮迫を打開するため設けられた度支使・塩鉄使等の財政使職は最早、容易にはこれを廃止して尙書省諸司に代替できぬ程の組織・制度になつていたのである。しかして右の引用文にある如く、江淮地方からの米輸送に活躍し王朝の危機を救つた韓滉が、貞元二年十二月、度支・諸道塩鉄轉運等使に就任し、ついで貞元五年二月には竇參がその後任となつて、度支・塩鉄・轉運諸使の一本化が成立したかに見えたが、竇參とその副使班宏との間の抗争に端を発し、また度支使と塩鉄轉運使は二分されることになる。二人の間の抗争の詳しい顛末は省略するが、その一部を冊府元龜<sup>卷七</sup>七台省部・交惡門・班宏条によつて見ると

揚子院塩鉄轉運之委輸也、〔班〕宏以御史中丞徐傑主之、頗不理、又以賄聞、〔竇〕參欲代之、宏執不可、參又選諸知院者、未嘗与宏議、宏知之、密疏參所用者過惡、而奏事輒留中、繇是与參有隙、

とあり、兩人は揚子巡院をはじめとする諸巡院長官の任用をめぐるでも激しく争つてゐる。その後貞元八年三月、竇參は度支使を班宏に譲つたものの、塩鉄使には張滂を推薦し班宏を牽制させることにしたので、今度は班宏と張滂との間に反目が生ずる。旧唐書<sup>卷三</sup>三三班宏伝に

〔竇〕參乃薦〔張〕滂爲戸部侍郎・塩鉄使、判轉運、尚隸於〔班〕宏以悅之、江淮兩稅、悉宏主之、置巡院、然令宏・滂共扶其官、滂請塩鉄旧簿歸於宏、宏不与之、每署院官、宏・滂更相是非、莫有用者、滂乃奏曰、班宏与臣相戾、巡院多欠官、臣掌財賦、國家大計、職不修、無所逃罪、今宏若此、何以輯事、

とあり、江淮の兩税は度支使班宏に委ねられたが、塩鉄・轉運は班宏の下で張滂が掌ることになった。しかるにまた兩人

の間でも巡院官任命に關して争いが絶えず、張滂の奏言によれば、巡院の欠官多く職務も満足に行えない状態に陥った。その結果、大曆故事に従つて地域的分掌制が復活したのである。唐会要<sup>四八</sup> 兩稅使に

〔貞元〕<sup>①</sup>八年四月、以東都・河南・江淮・嶺南・山南東道兩稅等錢物、令戶部侍郎・<sup>（主時）</sup> 輦運使張滂主之、東渭橋以東諸道巡院、悉隸滂、以閩輔・河東・劍南・山南西道財物、令戶部尚書・度支使班宏主之、其後宏・滂互有短長、宰相趙璟・陸贄具以其事上聞、由是

參用大曆故事、如劉晏・韓滉所分焉、

とあつて、度支使が西北部の財政を、〔塩鉄〕輦運使が東南部を分掌する制度が再々度成立したのである。以後唐末乾寧年間（894～897）頃までの期間、杜佑・李巽・王涯・李石・杜悰・王搏・孫偃等が一時的に一人でこれらの使職を兼任したことはあるが、それは極めて短期間であつて、概ね度支使と塩鉄輦運使は二人で分掌するのが通制となつたのである。<sup>②</sup>

さて張滂・班宏の地域的財政分掌に伴つて、これら使職管轄下の巡院も東南部の塩鉄輦運使系巡院と西北部の度支使系巡院に分割されたのは当然である。後述する如く貞元八年頃には西北部地域にも巡院が設置されていたことが明白であるが、右の引用記事では東渭橋<sup>③</sup>以東の諸道巡院が張滂管轄下に入つたことを記すのみで、度支使の西北部巡院について触れていないのは、或いは西北部巡院は従来より既に度支巡院であつたために、殊更特記する必要がなかつたせいかも知れない。それはともかく、崔造の改革や、竇參と班宏、班宏と張滂の抗争に見えただけでも、これら財政使職管轄下の巡院は地方出先機関として諸道に広く設置され、塩鉄・漕運・兩稅等の諸業務に關して極めて重要な任務をもち、それ故に巡院官任命問題が財政使職の権力抗争の一つの争点となつていたことを推察することができる。即ち前引通鑑で「諸使の職、之を行ふこと已に久しく、中外之に安んず、」と称される財政使職の機能は、実は張滂の「巡院欠官多し、……何を以て事を輯めん、」という言葉にも示されている如く、その地方出先機関の巡院機構があつて始めて可能だったのである。

## 二 史料に見える巡院名とその設置点

それでは唐後半期、度支使・塩鉄輦運使の下に巡院はどれだけ設置されていたのであろうか。具体的な巡院名に關する唯一のまとまつた記事は、新唐書<sup>四八</sup> 食貨志・塩法の項に劉晏が設置したとして記す「揚州・陳許・汴州・廬壽・白沙・

淮西・甬橋・浙西・宋州・泗州・嶺南・兗鄆・鄭滑」の所謂十三巡院であるが、この記事の信憑性には疑問がある。また胡三省は資治通鑑三貞元八年八月に記す陸贄の上奏中に見える「巡院」の語に注して

蓋劉晏始置巡院、自江淮以來達于河・渭、其後遂及緣辺諸道亦置之、

と述べるが、巡院制を少しく詳細に知りたい者にとって簡に過ぎる憾みがある。更に青山定雄氏は「転運使の権限の拡張に伴って巡院も亦広く全国的に設けられ、その職務も増した様で」云々と述べ、新唐書・食貨志の十三巡院中に存しない巡院名が現われる史料をいくつか掲げられたが、なお十分な説明とは言えない。そこで唐代諸史料に見える塩鉄転運使・度支使系巡院名を収集してみると、次表の如くである。

巡 院 名	藩 道 名	典 拠
(1) 上 都 院	京 兆 府	〔長慶〕二年三月、王播為淮南節度使、兼領塩鉄転運、播請置塩鉄印赴鎮、上都院、請別給賜、從之、(唐会要卷八八・塩鉄)
(2) 渭 橋 院	〃	〔知渭橋院官蘇洵授員外郎依前職……制〕(白氏文集卷三六・中書制詰六)
(3) 転運永豊院	華 州(?)	〔盛昂可監察御史裏行・知転運永豊院制〕(白氏文集卷三六・中書制詰六)
(4) 陝 府 院	陝 虢	〔知汴州院官・侍御史盧濛可檢校倉部員外郎、陝府院官盧合可兼侍御史、鄭滑院官李克恭可試大理評事、……並依前知院事同制〕(白氏文集卷三五・中書制詰五)
(5) 塩鉄転運東都院	東 畿	〔長慶〕四年詔、東都・江陵塩鉄転運留後、並改為知院官、(冊府元龜卷四八三・邦計部・總序門)
(6) 塩鉄転運河陰院	東畿・河陽	〔唐故朝議郎・侍御史・内供奉・塩鉄転運河陰留後河南元君(元相)墓誌銘〕(元氏長慶集卷五七・碑銘)
(7) 鄭 滑 院	義 成	陝府院の項参照
(8) 汴 州 院	宣 武	陝府院の項参照
(9) 宋 州 院	〃	……又康州流人宋州院官田洪評事、流到州二年、云々、(太平広記卷三八五・再生類〔崔紹〕出玄怪録)
(10) 塩鉄埤橋院	武 寧	〔王智興〕遣兵衛從〔崔〕雲、至埤橋而返、遂掠塩鉄院錢帛〔胡注・埤橋有塩鉄院〕及諸道進奉在汴中者并商旅之物、皆三分取二、(資治通鑑卷二四二・長慶二年三月乙巳条)⑧

(11)	泗州院	〃	〃	……歷寧陵・華陰二縣主簿、知泗州院事、得協律郎、(李文卷一五・墓誌「故河南府司錄參軍盧君(盧士璣)墓誌銘」)
(12)	淮口院	武寧或淮南	〃	元和九年、隴西李稼為塩鉄官、掌淮口院、(沈下賢文集卷五・記上「淮南都梁山倉記」)
(13)	塩鉄転運揚子院	淮南	〃	貞元末、擢授監察御史、遷虞部員外郎、充塩鉄転運揚子院留後、(旧唐書卷一三五・程昇伝)
(14)	白沙院	〃(?)	〃	其月(長慶元年三月)、塩鉄使王播奏、揚州白沙兩処納稅權場、請依旧為院、……並從之、(唐会要卷八八・塩鉄)
(15)	如皋院	〃	〃	〔開成三年七月〕廿日、卯畢、到赤岸村、問土人、蒼云、從此間、行百廿(里)」、有如皋鎮、暫行有堰、掘開堅堊、堊去進堰、有如皋院、專知官未詳所由、(入唐求法巡礼行記卷一)
(16)	塩鉄廬壽院	〃	〃	「韋宗立授檢校倉部員外郎・知塩鉄廬壽院等制」(樊川文集卷一九)
(17)	浙西院	浙西	〃	……後二年、加侍御史、知揚子院、……尋除浙西院、(太平広記卷一二三・報應類「韋判官」出陰德伝)
(18)	蘇州塩鉄院	〃	〃	蘇州塩鉄院招商官姓王、其家巨富、貨殖豐積、(雲笈七籤卷一二一・道教靈驗記「蘇州塩鉄院招商官修神呪道場驗」)
(19)	浙東院	浙東	〃	……〔王〕播不得已、署之江西院官、赴職、未及其所、又改為浙東院、僅至半程、又改南陵院、(太平広記卷二六五・輕薄類「陳通方」出臨川多士伝)
(20)	塩鉄宣歙院	宣歙	〃	是月〔開成元年二月〕、塩鉄宣歙院官・簡較膳部員外郎顏從覽為主客員外郎、(冊府元龜卷一四〇・帝王部・旌表門四)
(21)	宣州塩鉄院	〃	〃	宣州塩鉄院官彭顥、常病數月、云々、(太平広記卷三六七・妖怪類「彭顥」出稽神錄)
(22)	南陵院	〃	〃	浙東院の項参照
(23)	江西塩鉄院	江西	〃	……李尚書選、性嚴毅、不好戲笑、時〔周〕愿知江西塩鉄留後事、云々、(因話錄卷四・諧戲附)及び浙東院の項参照
(24)	塩鉄信州院	〃	〃	唐貞元末、鄭君知塩鉄信州院、(太平広記卷七三・道術類「鄭君」出逸史)
(25)	塩鉄福建院	福建	〃	〔元和十四年〕七月、塩鉄福建院官權長孺、坐賊一万三百余貫、云々、(冊府元龜卷一五〇・帝王部・寬刑門)
(26)	〔泉州〕塩鉄院	〃	〃	田渭為泉州刺史、宝曆二年、削渭官一任、徵本州塩鉄院官裴汾銅四十斤、渭使酒与汾交爭、為本道廉使奉奏、因各懲罰、(冊府元龜卷九一四・總錄部・酒失門)

②⑦	塩鉄転運山南東道院	山南東道	勅……前知塩鉄転運山南東道院事・殿中侍御史周徹等、云々、（文苑英華卷四一〇・中書制詰三一・元稹撰）授蕭陸鳳州周徹渝州刺史制）
②⑧	江陵塩鉄転運院	荊南	塩鉄転運東都院の項参照
②⑨	湖南塩鉄転運院	湖南	……又守頼（原注・湖一本作湖）南塩鉄転運院、以能遷官、移嶺南、益積功勞、（柳先生集卷一〇）「故嶺南塩鉄院李侍御（李嶠）墓誌」（元和）三年五月、塩鉄使李巽上言、得湖南院申、云々、（唐会要卷八九・泉貨）
③①	嶺南塩鉄院	嶺南	右項参照
③①	東都度支院	東畿	崔造作相（貞元三）、改易度支之務、令（裴）延齡知東都度支院、（旧唐書卷一三五・裴延齡伝）
③②	度支山南東道巡院	山南東道	鄭浪、德宗時、為度支山南東道巡院、貞元四年九月、坐乾沒財物、云々、（冊府元龜卷五一・邦計部・貪汚門）
③③	江陵度支院	荊南	〔貞元元年夏四月己卯〕江陵度支院失火、燒租賦錢穀百餘万、云々、（旧唐書卷一二・本紀）
③④	度支山南西道分巡院	山南西道	元和四年六月勅、……度支山南西道分巡院官、宜兼充劍南東西川・山南西道兩稅使、（唐会要卷八四・兩稅使）
③⑤	劍南東川院	劍南東川	黔州有井四十一、咸州・嶺州井各一、果・闕・開・通井百二十三、山南西院領之、叩・眉・嘉有井十三、劍南西川院領之、梓・遂・源・合・昌・渝・瀘・資・榮・陵・簡有井四百六十、劍南東川院領之、皆隨月督課、（新唐書卷五四・食貨志・塩法の項）
③⑥	度支劍南西川院	劍南西川	知度支西川院事・承奉郎・殿中侍御史・内供奉・賜緋魚袋張植、（八瓊室金石補正卷六八）諸葛武侯祠堂碑・碑陰記）及び右項参照
③⑦	度支河中院	河中	專知度支河中院・朝散大夫・檢校尚書職方郎中・兼侍御史・上柱（国）・賜緋魚袋馮興、（金石萃編卷一〇三）靈巖公神堂碑陰記）
③⑧	靈州分巡院	靈武（朔方）	大中四年三月、因収復河隴、勅令度支取管其塩、仍差靈州分巡院官、專勾当、（唐会要卷八八・塩鉄使・温池条）

以下、表に即して問題のあるものに若干の説明を加えてみる。

②渭橋院 渭橋（京兆府高陵県内に在り）は長安北を流れる渭水に架かる東渭橋のこと、ここに東渭橋倉（渭橋倉）が設置さ

唐後半期に於ける度支使・塩鉄転運使系巡院の設置について（高橋）



れており、江淮から京師長安への漕運の終点として重要な所であった。渭橋院はこの東渭橋付近に設けられたものであらう。

(3) 転運永豊院 唐後半期、①豊州都防禦使豊州管内、②江南西道信州管内、③桂管経略使桂州管内、にそれぞれ永豊県があった。しかし①は中国西北辺境にあって、塩鉄転運使管轄外であるから、ここに転運院が置かれた筈はない。②の永豊県は乾元元年(768)から元和七年(822)の間、置かれた。ところで転運永豊院の典拠である白居易の「中書制詰」は白居易が元和十五年(830)十二月、主客郎中・知制詰に就任以後、長慶二年(832)七月、杭州刺史に転任するまでの間に書かれたものであるから、②に置かれた転運院ではなからう。③は長慶三年、豊水県と改名された。未だ長慶年間以後の転運永豊院の記事を検索し得ていないから、その意味で③に転運院が置かれた可能性が皆無ではないが、中国南方辺境の、しかも州治ではない③に転運院が設置される強い理由は今の所見出せない。それよりは、隋以来、渭水が黄河へ流入する渭河口に設けられていた永豊倉付近に、永豊院は設置されていたと考えた方がよいのではなからうか。永豊倉乃至渭〔河〕口は、有名な裴耀卿・劉晏の転搬法に於いても漕運上の拠点であって、これは劉晏以後も変わりなかつたから、今は暫くこの様に考えておくことにする。

(6) 塩鉄転運河陰院 河陰県は周知の如く黄河と汴河の合流地点に設けられた漕運の要衝であり、創置された開元二十二年(734)以来、河南府の属県であったが、会昌三年(833)孟州新設と共に孟州の属県となり、同年、孟州は河陽節度使の会府となった。

(7) 鄭滑院 (9) 宋州院 この二つに問題はないが、旧唐書<sup>卷一</sup>本紀に「宋滑院」の名称が見える。即ち会昌四年六月、澧州刺史に貶された崔洪が、同月癸丑、更に恩州司馬員外置に貶され、その理由として

以〔崔〕洪領塩鉄時、欠宋滑院塩鉄〔錢〕九十万貫、

とある。これによると崔洪が塩鉄〔転運〕使就任時(開成四年(839)夏から会昌三年二月の間)、「塩鉄」宋滑院が存在したかの様であるが、しかし太平広記<sup>卷三</sup>報應類「韋判官」<sup>出松</sup>に

唐博陵崔忠任扶溝令、……〔崔〕忠聞淮南杜相悛方求政理、偶員書啓、兼錄為県課績、馳使揚州、……時相國都督維揚兼判塩鉄、奏

〔崔〕応知鄭滑院事、云々、

とあって、淮南節度使兼塩鉄〔転運〕使杜慆が話の主人公の崔応を知鄭滑院事に採用している。この小説自体は伝奇的なものでそのまま信用できないにしても、話の舞台設定は現実的なものである。さて杜慆がこの職に在ったのは会昌三年乃至四年の時であるから、この話は右の崔洪の事件と略々時間的に連続していることになる。とすればこの間に宋滑院と鄭滑院が並存した筈はなく、また宋滑院が鄭滑院に編成替えされた可能性も少ない。従って「宋滑院」は「鄭滑院」の誤りか、或いは「宋州院と鄭滑院（乃至滑州院）」の意味か、どちらかであって、少なくとも「宋滑院」という単独の巡院は存在しなかったのではないかと考えられる。

①塩鉄埴橋院 埴橋は徐州符離界にあり、汴河漕運路の要衝であった。元和四年（809）、ここに宿州が新設され武寧軍節度・徐泗濠等州觀察使の巡属となったが、長慶元年（821）、廃州され旧に復した。しかし太和七年（833）、再び埴橋に宿州が置かれ、前と同様、武寧の巡属となった。そして宿州復置と共に東都塩鉄院官呉季真が宿州刺史に任命されたが、日野開三郎氏も指摘される如く、宿州設置は巡院が置かれていた埴橋の重要性と関連ある様に思われる。さればこそ塩鉄院官が宿州刺史に任命されたのであらう。

②淮口院 淮口も漕運路線上にあったらしい。唐末の記事ではあるが、咸通九年（868）七月、桂州で叛乱を起した徐州の龐勛が北上して泗州を窺い、この泗州攻防が戦局の焦点となっていた時のこととして、資治通鑑卷二咸通九年十一月己未条に

先是、令狐綯遣李湘將兵数千救泗州、与郭厚本・袁公升合兵屯都梁城、胡注〇都梁城、在泗州府臨泉北都梁山、云々、与泗州隔淮相望、……十二月甲子、李湘等引兵出戰、大敗、賊遂陷都梁城、執湘及郭厚本送徐州、泗水入淮之口、埴橋路絶、謂東南漕取入上郡之路絶也。

とある。胡三省によれば淮口は泗水が淮水に流入する所であるというが、正確にはその地点を判定しかねる。しかし明らかに泗州南方に於ける交戦で淮口が叛乱軍によって占拠され、その結果、漕運路が断絶したと言うのであるから、淮口は泗州・楚州間を結ぶ漕運路（恐らくは淮水）上に位置する漕運の拠点であったと解されるのである。但し淮口が淮南に属するか、武寧に属するかは不明である。

③塩鉄転運揚子院 揚子は揚州の属県で、揚州郭下江都県の南十数里の所にあり、周知の如く南方漕運と河陰方面への漕運を結ぶ最重要地点であった。なお揚子院が江淮院とも称されるのは、揚子院が江淮地方の中心的巡院であったためであろう。

④白沙院 典拠に掲げた唐会要の記事は、一応次の二通りに解釈できよう。

〔a〕揚州と白沙の各々に設置されている二ヶ所の納糧場を旧例に依り〔巡〕院と為す。

〔b〕揚州管下の白沙に設置されている二ヶ所の納糧場を旧例に依り〔巡〕院と為す。

〔a〕の解釈によれば、揚州と白沙に巡院が設置されたことになる。白沙について「中国古今地名大辞典」(商務印書館)を見ると、唐五代に存した白沙の地名は三・四に止まらないが、県以上のものは皆無である。揚州については、江都県以下七県を含む州域と、州治の意味に解することができようが、州域を指すとすれば、広大な揚州と小規模な白沙を並列するのは不自然である。従って〔a〕の解釈をとると、揚州治・白沙に巡院が置かれたとなろう。しかし長慶年間以後、唐代史料から揚州院の名称は三・四検索できるが、揚子院と混同している場合が多く、真の揚州院は未だ確定できない。因みにここで言う揚州院が揚子院を指すものでないことは、前項で述べた様に重要な位置にある揚子院が、一時的であれ納糧場に編成替えされる可能性が無いことにより、明白であろう。一方〔b〕の解釈によれば、揚州揚子県白沙に巡院が設けられたことになる。この白沙〔鎮〕は、五代の時、淮南呉王楊溥が迎鑾鎮と改名し、更に宋乾德二年(961)には建安軍に、大中祥符六年(1033)には真州へと昇格していった発展途上の町であり、その位置は「東至揚州六十里、南臨大江、」と言われるから、白沙は長江北岸に面し、長江から入って揚州へ通ずる交通の要衝であったと考えられる。なお唐末には白沙鎮と共に白沙場が存したことも知られ、唐後半期、揚子県白沙は軍事的・経済的に重要性を増していったのであろう。但し〔b〕によれば、白沙に二ヶ所の納糧場が設置されていた点、現実的に考えて解釈上の難点になるが、〔a〕〔b〕いずれの解釈をとるにせよ、白沙に巡院が置かれたことは明白である。そうとすればこの白沙は〔a〕の場合も、唐後半期、発展途上の長江北岸の揚子県白沙である可能性が強いのではなからうか。今はこの様に考えておき、〔a〕の解釈をとった場合の揚州巡院についてはなお後考に俟つことにする。

(6)如皋院 これは典拠に掲げた様に、入唐日本僧円仁の記録・入唐求法巡礼行記<sup>卷</sup>に見えるものであるが、同書同卷翌日の開成三年(888)七月廿一日条に、運河を船で如皋鎮より揚州海陵県治へ向う途中、見かけた情景として

塩官船積塩、或三・四船、或四・五船、雙結纒網、不絶数十里、相隨而行、乍見難記、甚為大奇、

と述べており、この付近に製塩場があったことを推測せしめるが、太平寰宇記<sup>卷一</sup>淮南道・泰州・如皋県に

唐太和五年、析海陵之五鄉置如皋場、屬揚州、

とあって、太和五年(833)如皋場が置かれたことが判る。即ち如皋院はこの如皋場に設置されていたものであろう。

(6)塩鉄廬寿院 廬州・寿州は興元元年(784)から貞元四年(788)まで濠寿廬三州都団練觀察使が置かれていた時は淮南節度使の管轄外にあったが、それ以後は寿州団練使(貞元四年設置。一時変更あり)、舒廬滁和四州都団練使(貞元十六年設置)が置かれていたものの、いずれも淮南節度使に隸属していた。

(7)浙西院と(8)蘇州塩鉄院 藩道名の付された巡院と同じ藩道内の州名の付された巡院は、この例だけではなく、(2)と(21)、(23)と(24)、(25)と(26)等がある。これらがそれぞれ同一巡院であるか、それとも別の巡院であるかは、今の所不明であるので、各々並記しておく。中には或いは実質的に同一巡院のものがあるかも知れない。

(24)南陵院 (24)塩鉄信州院 南陵県は宣州の属県で、県内に梅根監・宛陵監の二鑄錢監があり、また塩鉄信州院は自から銀の精錬を行っていた様でもあるが、信州には玉山〔鑄錢〕監があった。

以上塩鉄転運使系統の藩道名の付いていない巡院を中心として、設置点及びその設置点の有する財政上の背景等を若干説明してみたが、判然としないものも残るものの、塩鉄転運使系巡院の多くが塩鉄・漕運乃至交通関係の要衝に、或いは上都・東都・蘇州・江陵等大都市に設置されていたことが推察されるのである。

次に度支巡院について見てみよう。(3)と(33)は塩鉄転運使管轄下の東南部に設置された度支巡院である。しかしこれらは典拠によって分明の通り、貞元年間初期に置かれていたものであり、第一節に前述の如く貞元八年(833)四月の度支使班宏と塩鉄転運使張滂の財政分掌に伴って、これら東南部の度支巡院は廃止乃至塩鉄転運使に転属した筈である。しかるにこれ以後も、東南部諸道に度支巡院が設置されたことがあった。唐会要<sup>卷八</sup>八 塩鉄に

太和二年七月勅、潼關以東度支分巡院、宜併入塩鉄江淮・河陰留後院、

とあつて、太和二年(880)七月、當時潼關以東の東南部に度支分巡院が設けられており、これが塩鉄江淮(揚子)・河陰留後院に併入されたことが判る。しかし更に樊川文集<sup>九</sup>卷一「房次玄除檢校員外郎充度支靈塩供軍使等制」に、

勅前知度支河南院事・朝散大夫・試太子司議郎・兼侍御史・上柱國・賜緋魚袋房次玄等、云々、

とあるによれば、知度支河南院事房次玄が改任されている。この杜牧の制語は大中五年(882)から同七年にかけて書かれた筈であるから、当時また度支巡院が東南部に設置されていたことになる。この様に太和・大中年間に東南部地域に度支巡院が設けられていたことが確認される訳で、この点から当時、度支使が東南部諸道の財政支配に進出していたのではないかと考えられるが、この問題については指摘しておくに止めたい。

さて史料ではその固有の巡院名を確認できないが、間接的に、北部諸道にも度支巡院が設置されていたことが判る。即ち唐陸宣公集<sup>八</sup>卷一「中書奏議二」請減京東水運取脚價於緣辺州鎮儲蓄軍糧事宜狀」の前半部で、陸贄は吐蕃等の侵入を阻止すべく中国西北辺地帯の軍事的・経済的強化の必要性を論じ、そして当該地方の財政状態について

度支物估賑高、軍郡穀價賑貴、……度支以苟售滯貨為功利、而不察辺食之盈虚、軍司以所得加餉為羨余、而不恤農人之勤苦、雖設巡院使相監臨、既失綱条、賑成糞壤、至有空申海帳、偽指困倉、計其數則億万有余、考其實則百十不足、巡院巧譖於会府、会府承詐以  
上聞、云々、

とあり、高物価と度支・軍司の利益追求が弊害となっており、かかる事態を監督すべき巡院も本来の任務を果していない状況を述べている。巡院の任務については暫く措き、これにより西北辺地帯に巡院が設けられ、しかも「巡院巧譖於会府、」とあるによれば、藩道単位に設置されていたことが推察される。更に陸贄はこの上奏の後半部で、江淮からの漕運量を減額し、その減額した分の米を江淮で売却し、その売上金と漕運減額分の漕運費とで以て京兆・辺鎮で和糴する策を述べた後

臣已令度支巡院、勘問諸軍州米粟時價、兼与当管長吏商量、令計見糴之田、約定所糴之數、得鳳翔・涇陽・邠寧・鄜坊・丹延・夏綏銀・靈塩・振武等道・良原・長武・平涼等城糴、云々、

とあつて、ここに掲げられている諸道が辺鎮和糴の対象地域であり、陸贄は度支巡院に命じて当該地方の米粟時価を調査し、地方長官と協議の上、墾田数を計り、和糴量を約定せしめている。これにより、前述の巡院が設けられていた西北辺地域とはこれらの諸道であり、そしてまた前述の巡院は度支巡院であつたことが確かめられるのである。なお資治通鑑<sup>三三</sup>ではこの陸贄の上奏を貞元八年八月条に繋けているから、それ以前に既に度支巡院が西北辺諸道に設置されていたことが明白である。そうとすれば、史料からは確認できない河東道や、更に旧河北道の恭順藩道にも、度支巡院が設置されていたと想定しても大過ないであらう。

そこで再び眼を塩鉄転運使管轄下の東南部に転ずれば、東南部に於いても、間接的な巡院設置の記事を見出す。唐会要<sup>三八</sup> 塩鉄・長慶二年(822)五月の勅文に次の様にある。

……如聞、淄青・兗・鄆三道、往年糴鹽餉錢、近取七十萬貫、軍資給費、優贍有余、自塩鉄使取管已來、軍府頓絕其利、……其塩鉄使、先于淄青・兗・鄆等道管内、置小鋪糴鹽、及巡院納權、起長慶二年五月一日以後、一切並停、云々、

即ち淄青・兗・鄆の各道管内で巡院が塩専売税の収納を行つており、この巡院は文意から明らかな如く、塩鉄〔転運〕使管下の巡院である。因みに、これら三道はもと淄青平盧軍節度使一道であつたが、憲宗の強藩討伐によつて元和十四年(819)二月に平定され、その広大な領域は勢力削減のため三道に分割されたものであり、これに伴つてこの地域にも全面的に塩専売制が施行されたのであらう。この様にかつての世襲藩鎮にも巡院が設置されたのであるから、今の所史料に見出せない鄆岳・陳許(忠武)等道には、必ずや巡院が設けられていたに相違ないであらう。

以上、表に基づいて塩鉄転運使・度支使下の巡院設置について見てきたが、申すまでもなく、表に掲げた巡院名以外にも筆者の見落したものの、或いは史料に残らなかったものがあるかもしれないし、また白沙院の例から推測される様に、これらの巡院が総て唐後半期に一貫して設置されていた訳ではなく、中には廃止されたり、後に新たに置かれたものもあるだらう。しかし縷々述べ来つた所により、唐朝の勢力の及ぶ殆ど総ての藩道に、これら中央財政使職下の巡院が設置されていた大勢は明らかになつたと思われ。

### 三 塩鉄転運使系巡院と留後

これまで説明なしに一括して塩鉄転運使系巡院と分類してきたが、表に掲げた巡院名の中に、塩鉄某院乃至転運某院と見えるものがある。しかしこれによって、塩鉄某院は塩鉄使下の巡院で塩鉄関係のみをその財政業務としていた、とは断定できない。たとえば元氏長慶集<sup>八四</sup>制詰「授李立則檢校虞部員外郎知塩鉄東都留後制」に

勅李立則、国有移用之職、曰転運使、毎歳伝置貨賄於京師、其大都要邑之中、則委吏以專留事、遷洛之間、蓋其一也、

とあつて、制詰の題には「塩鉄東都留後」とありながら、その勅文では転運業務について述べている。この「塩鉄東都留後」の正式の職名は表の典拠からも分明の如く「塩鉄転運東都留後」であり、その巡院名は「塩鉄転運東都院」であろう。また淮口院は、その典拠「淮南都梁山倉記」によると、塩鉄官李稼が知院官となつてゐる故、塩鉄淮口院とも想定できるが、知淮口院官李稼は明らかに漕運業務に関与してゐる。更に史料に頻出する河陰院・揚子院・江陵院等は、塩鉄某院と書かれている例が多く、塩鉄転運某院と著されている例はむしろ極めて少ないのである。この様に「塩鉄某院」とあるから塩鉄使下の巡院であるとは直ちに断定できないのであつて、「塩鉄某院」の多くは、正式名称としては「塩鉄転運某院」であつたと考えられる。しかし、だからと言つて、塩鉄関係のみ或いは転運関係のみを財政業務とする巡院がなかつたという訳ではなく、転運永豐院や如皋院等にかかる巡院に相当するかも知れないし、また塩鉄関係乃至転運関係のいずれかを主たる財政業務とする巡院もあつただろう。それはともかく唐後半期、塩鉄使と転運使は結合して塩鉄転運使となつたから、その出先機関である巡院は、總体的に塩鉄転運使系巡院と称して差支えない様に思われる。

最後に留後について述べる。東南部諸道の塩鉄転運使系巡院の中で、特に重要な地点に設置された巡院には留後が置かれ、留後院とも呼ばれた。その例として上都留後・東都留後・河陰留後・揚子留後・江陵留後・嶺南留後の六例があるが、上都留後は塩鉄転運使が觀察使等を兼ねて地方に出た時に置かれたものであり、嶺南留後は大中年間の文獻に僅かに見えるだけである。そして東都留後・江陵留後は、冊府元龜<sup>八三</sup>邦計部・総序門に

〔長慶〕四年詔、東都・江陵塩鉄転運留後、並改為知院官、

とある様に、長慶四年(824)に留後が廃され、一般巡院と同様、知院官となった。従つて長慶四年まで略ぼ恒常的に留後が置かれていたのは、東都・河陰・揚子・江陵各院の四所であり、これらの巡院は各々、地方大都市を控え或いは漕運等の重要地点であつたために、留後が置かれていたのであるが、また付近巡院の中心的位置をも占めていたのである。一方、度支巡院には留後が置かれた形跡は見当たらないが、山南西道分巡院が西部地域の中心の巡院であつたと思われる。かかる留後の例により、全国的に設置された巡院、就中塩鉄転運使系巡院は全てが同等の地位にあつたのではなく、設置点の財政的・政治的重要性に応じて、上級・下級の差があつたことを推測できるのであり、更に想像を逞しくすれば、塩鉄転運使→留後院→藩道の中心的巡院→それ以下の巡院、という指揮命令系統が導き出されるのであるが、この点については今後なお検討を加えなければならぬ。

### おわりに

以上述べた所を要約すれば次の如くである。安史の乱後、王朝財政の中枢機関に成長した度支使・塩鉄転運使等財政使職変改の試みが、建中・貞元初め、楊炎・崔造によつて相次いでなされ、いずれも失敗に終つたが、これら財政使職の機能の基礎は、その地方出先機関である巡院組織網にあつた。この巡院組織は貞元八年八月、再々度の度支使と塩鉄転運使による東西分掌制確立に伴い、西北部に度支巡院、東南部に塩鉄転運使系巡院と区別された。そしてそれ以後の史料によつて、唐後半期、唐朝の勢力の及ぶ殆ど総ての藩道に巡院が設置されていたことを確認し、更に重要地点の塩鉄転運使系巡院には留後が置かれていたことにより、多数の巡院間には上級・下級の差があつたのではないかと推測した。以上の所論にも細部になると判然しない点が残るものの、藩道を基本的単位として恒常的な中央直轄の機構が成立した点は、安史の乱以前には見られなかつたものであり、このことは乱後の唐朝支配体制の構造の変化——殊に藩鎮体制の出現——に必然的に連関するものである。それでは唐朝はかかる巡院組織のもとにどの様な下級機関を設け、いかなる業務を行い、それが唐後半期の歴史にどの様な意義を有しているのか、総て次の機会に残された問題である。

注 ①拙稿「劉晏の巡院設置について」(集刊東洋学・二八)



②度支使と塩鉄転運使による地域的分掌制については、夙に次の論考で触れられている。

青山定雄「唐宋時代の転運使及び発運使」(同氏著「唐宋時代の交通と地誌地図の研究」所収) Denis Twitchett, "The Salt Commissioners after An Lu-shan's rebellion" Asia Major, New Series, Vol. IV, Pt. 1, London, 1954. 磯波護「三司使の成立について—唐宋の変革と使職—」(史林・四四—四)

これらを参考にして筆者の視点で、分掌制成立過程を略述する。従ってこの三論考と重複する所が多分にあるが、煩を避け逐一注記しないので御了想をいただきたい。

③資治通鑑<sup>卷二六</sup> 建中元年春正月・同年三月条参照。

④旧唐書<sup>卷二</sup> 本紀・建中元年三月癸巳条。

⑤旧唐書<sup>卷一八</sup>・新唐書<sup>卷四二</sup> 楊炎伝、資治通鑑<sup>卷二六</sup> 建中元年春正月条等参照。

⑥旧唐書<sup>卷二</sup> 本紀・建中三年八月丁未・辛酉・甲戌条、新唐書<sup>卷五</sup> 食貨志・漕運の項、資治通鑑<sup>卷二七</sup> 建中三年八月丁未条等参照。

⑦資治道鑑<sup>卷三二</sup> の「貞元元年」十二月甲戌、戸部奏、今歲入貢者凡百五十州、」の記事に、胡三省は「時河朔諸鎮及淄青・淮西皆不入貢、河隴諸州又没于吐蕃、」と注しており、更に当時、朱泚・李希烈の乱等で王朝財政は逼迫し、江淮運米に全く依存している情況は、同上書<sup>卷三二</sup> 興元元年十二月庚申条、同上書<sup>卷三二</sup> 貞元二年夏四月条等により明白である。

⑧冊府元龜<sup>卷九八</sup> 邦計部・漕運門・貞元二年正月条。

⑨敕耕畷撰・唐僕尚丞郎表<sup>卷三</sup> 参照。

⑩旧唐書<sup>卷三</sup> 班宏伝参照。

⑪唐会要はこの記事を建中三年八月と貞元七年六月の記事の間に繋げてあって、一見「建中」八年の記事の如くであるが、いうまでもなく「建中」は四年までしかなく、更に同書<sup>卷八</sup> 転運塩鉄總叙等の該当記事によっても、これが「貞元」八年の記事であることは明白である。

⑫「其後」が「于時」の誤りであろうことについては唐僕尚丞郎表<sup>卷一</sup> 轉考上戸部尚書・班宏条参照。

⑬唐僕尚丞郎表<sup>卷三</sup> 参照。

⑭しかし班宏・張滂の如き財政全般に互る截然とした地域的分掌制が、唐末まで存続したか、についてはなお問題の残る所である。本文<sup>三四</sup> 参照。

⑮東渭橋については本文<sup>二九</sup> (2)渭橋院の項参照。

④前掲拙稿「八頁」参照。

⑤青山氏前掲論文三〇頁及び同論文・註(20)参照。

⑥特に必要でない限り典拠は一例に止め、しかもできるだけ元和・長慶年間頃のもの掲げる。なお青山氏は前掲論文・註(20)で表中(2)・(3)・(4)・②の典拠を、鞠清遠氏は「唐代財政史」(中嶋敏訳註)一頁(註二)で②・③の典拠を指摘されている。更に鞠氏は同書同所で表中(1)・④・⑤・⑥・⑦・⑧の巡院名を掲げているが、その典拠は示していない。

⑦通鑑の文中に「堽橋院」の名は著されていないが、全唐文七四七李商隱撰「為河東公(東川節度使柳仲郢)上楊相公狀」に「堽橋院」の語が見える。

⑧入唐求法巡礼行記三開成五年八月十九日条に「……到高陵界渭橋、渭水闊一里許、橋闊亦余、」とある。

⑨外山軍治「唐代の漕運」(史林・二二二)四七頁注⑧参照。

⑩唐陸宣公集八卷中書奏議三「請減京東水運取脚價於緣辺州鎮儲蓄軍糧事宜狀」に「頃者毎年從江西・湖南・浙東・浙西・淮南等道、都運米一百一十萬石、送至河陰、其中減四十萬石、留貯河陰倉、……唯余四十萬石、送赴渭橋輸納、」とある。

⑪新唐書卷四地理志・江南道・信州・上饒縣条参照。

⑫花房英樹「白居易年譜」(同氏著「白居易研究」所収)参照。

⑬新唐書卷四地理志・嶺南道・桂州・豐水条参照。

⑭元和郡縣圖志卷二華州・華陰縣条参照。

⑮青山氏も前掲論文・註(20)で「……河陰、永豐等漕運倉庫の所在地に巡院が設けられたのであろう。」と言われる。

⑯通典卷一食貨・漕運・開元十八年条、新唐書卷五食貨志・劉晏の漕法の項参照。

⑰新唐書卷三地理志・河北道・孟州・河陰縣条参照。

⑱新唐書卷六方鎮表・東畿・會昌三年条参照。

⑲旧唐書卷七一・新唐書卷八二崔洪伝にも同事件の記事があり、いずれも「宋滑院」に作る。

⑳唐饒尚丞郎表三参照。

㉑元和郡縣圖志卷九河南道・宿州、唐會要卷七州縣改置上河南道・宿州、新唐書卷六方鎮表・徐海沂密、各条参照。

㉒唐會要同右卷同右条参照。

㉓旧唐書卷七下本紀・太和七年三月辛丑条参照。

唐後半期に於ける度支使・塩鉄樞運使系巡院の設置について (高橋)

③日野開三郎「唐代藩鎮の跋扈と鎮將」(一)(二)(東洋學報・二七一—二七六) 參照。

④青山定雄「唐代の水路工事」(同氏前掲著書所収) 參照。

⑤旧唐書卷三五 程昇伝に「元和初、塩鉄使李異薦(程)昇曉達錢穀、請乘瑕錄用、擢為侍御史、復為揚子留後、」とあるが、同書卷一王播伝に「先是、李異以程昇為江淮院官、」とあって、揚子(院)留後と江淮院官が同じものであることが判る。

⑥新唐書卷四 地理志・淮南道・揚州条參照。

⑦文獻通考卷三八 輿地考四古揚州に「真州、本唐揚州揚子縣之白沙鎮、」とある。但し鎮がいつから置かれたかは不明である。

⑧資治通鑑卷七三 後唐同光二年冬十月条の「吳王如白沙、觀樓船、更命白沙曰迎鑾鎮、云々、」の記事に対する胡注參照。

⑨全唐文卷六六 陳鴻撰「廬州同食館記」(年配)に「先時、郡(廬州)米數万石輸揚州、……出巢湖入大江、歲為風波沈溺者半、……由申港出新婦江、至白沙、人不勞、水無害、」とあって、廬州から揚州へ米を輸送する場合、長江に出、更に長江を下って白沙に至っている。因みに右の文中に見える「新婦江」は「中国古今地名大辭典」新裕河条に「自安徽巢縣、流经含山縣南、又東流至和縣界、入於江、……亦名新婦港、」とあるものに同じか。なお日野開三郎氏は港岸草市の一例として唐詩を引用し「白沙は岸辺にあつた千家の町で、揚子江に臨んで旅店が設けられていた」と述べている。同氏著「統唐代邸店の研究」八二頁參照。

⑩桂苑筆耕集卷一 荦牒「張雄充白沙鎮將」に「……事須差權勾当白沙鎮務、兼知場司公事、」とあり、また同書同卷に「柳孝謙知白沙場權酒(務)の牒がある。

⑪新唐書卷八 方鎮表・淮南条參照。なお壽州團練使が淮南節度使に隸屬するものであることは、同書同条の建中四年(783)に「置壽州團練使、」興元元年(784)に「淮南節度龍領壽州、」とあるによつて判る。

⑫元和郡縣志卷二 江南道・宣州・南陵縣、新唐書卷四 江南道・宣州・南陵、各条參照。

⑬太平広記卷七 道術類「鄭君」史述に「唐貞元末、鄭君知塩鉄信州院、常有頑夫、不察所從來、每於人吏處、恐脇茶酒、鄭君擒至答脊、方庭煉鉄、次計銀數万兩、杖詒曳去、云々、」とある。

⑭新唐書卷四 地理志・江南道・信州条參照。

⑮江淮院が揚子院と同じものであることは、前注③參照。

⑯杜牧は大中五年秋、考功郎中・知制誥に就任し、翌年、中書舍人になったが、十一月、病を患ひ、大中七年に死亡した。繆鉞「杜牧行年簡譜」(同氏著「杜牧詩選」(人民文学出版社・北京・一九五七)所収)參照。

⑰日野開三郎「唐代藩鎮の跋扈と鎮將」(一)(二)(東洋學報・二六一—二六四) 參照。

⑤本文引用文に見える様に、淄青等三道に於ける塩専売制は長慶二年五月、停止されたが、太和五年(833)平盧節度使に就任した王承元(吳廷燮撰・唐方鎮年表<sup>卷三</sup>平盧条参照)の上牒により、再びこの地域に塩法が施行された(旧唐書<sup>卷四二</sup>・新唐書<sup>卷四八</sup>王承元伝参照)。

⑥新唐書<sup>卷五</sup>食貨志の十三巡院中に陳許・淮西の名が見える。この十三巡院の史料はオリジナルなものではないと考えるが、個々の巡院については拠った原史料があるのかも知れない。但し世襲藩鎮淮西は元和十二年九月に討伐され、翌年には藩鎮自体が廢止・解体された(日野氏前注<sup>⑥</sup>論文<sup>三〇</sup>・唐方鎮年表<sup>卷八</sup>淮西等条参照)から、少くとも元和十三年以降、淮西巡院は存在しなかったと思われる。

⑦黔中觀察使管内では觀察使が塩鉄使を兼任した例(全唐文<sup>卷七五</sup>章建撰「黔州刺史薛舒神道碑」・旧唐書<sup>卷二</sup>建中元年五月己卯条・旧唐書<sup>卷五七</sup>郁士美伝)や黔中塩鉄使判官の記事(唐会要<sup>卷九</sup>諸使下・諸使雜錄下・大中二年七月条)があり、また新唐書<sup>卷五</sup>食貨志に黔州等の塩井を山南西院が領していたことを記すから、黔中に巡院は設置されていなかったであろう。

⑧沈下賢文集<sup>卷五</sup>記上「淮南都梁山倉記」に「元和九年、隴西李稼為塩鉄官、掌淮口院、病其滯滯、思欲以為救、而乃与揚子留使議之曰、自閩越巴西、百郡所貢、饒晚皆出是、以炎天累月之久、滯於尺咫之地、荷工諸備、尽其所儲、不能限十半之食、只益奸偷耳、幾或有終歲而不得返其家者、今誠得十數之倉、列於所便、以造出入計、無憂也、正月、河水始津、尽笕所畜而西、六月之前、虛陳以待東之至者矣、如此則役者逸、而弊何從生哉、議定、即以狀白、得遂其便、於是稼度邇上卑隴無堪地、遂掘庚於淮南都梁山、云々、」とある。

⑨青山氏は前注<sup>②</sup>論文・註(20)で「……塩鉄と漕運の両者が必要などころでは、塩鉄転運使のもとに一つの巡院が併せ掌ったのであろう。」と指摘されている。

⑩唐会要<sup>卷八</sup>転運塩鉄給叙・貞元十年条に、「浙西觀察使」李錡が塩鉄転運使を兼ねた時のこととして「時塩鉄転運有上都留後、以副使潘孟陽主之、」とある。

⑪唐会要<sup>卷八</sup>本文前掲表・(5)塩鉄転運東都院、(6)塩鉄転運河陰院、(13)塩鉄転運揚子院の典拠の項参照。

⑫樊川文集<sup>卷九</sup>「李鄂除校校刑部員外郎充塩鉄嶺南留後……等制」参照。

⑬前注<sup>⑤</sup>に引用した文に見える知淮口院官が漕運改善について揚子留後と計議しているのは、その一例証である。

⑭唐会要<sup>卷八</sup>阿稅使・元和四年六月の勅に「其塩鉄〔転運〕使揚子留後、宜兼充淮南・浙西・浙東・宣歙・福建等道阿稅使、其江陵留後、宜兼充荆南・山南東道・鄂岳・江西・湖南・嶺南阿稅使、……度支山南西道分巡院官、宜兼充劍南東西川・山南西道阿稅使、」とある。

唐後半期に於ける度支使・塩鉄転運使系巡院の設置について (高橋)